

< 2012年5月 >

古賀 順子

「5月フランス大統領選挙」

5月のフランスは、一日メーデーの祝日から始まります。スズランの白い花があちらこちらの街角を飾る日です。この日に限り、フランス中どこでもだれでもスズランを売ることができます。今年は5年に1度の大統領選挙。4月22日第1回投票を終え、5月6日決戦投票を間近に控え、パリのサン・ジェルマン大通りでは左派オランド候補を支持する労働組合(CGT:労働総同盟)のデモ行進が午後中続きました。

2月中旬、現職サルコジ大統領が立候補を表明し、右派サルコジ対左派オランド候補の最終決戦は予想通りです。10人が立候補した第1回投票の結果は、オランド氏(28.63%)、サルコジ氏(27.18%)、マリヌ・ルペン女史(17.90%)でした。現職大統領がトップ当選しなかったこと、極右国民戦線党に過去最高の642万票の支持があったことなど、サルコジ政権に不満を訴えるフランス国民の風潮は明らかです。さらには前回2007年大統領選の選挙運動資金疑惑(カダフィーが多額の資金をサルコジ氏に渡したという疑い)など、現大統領にはマイナスの要因が続きます。サルコジ氏にとって最後の頼みの綱が2日夜のテレビ討論でした。

テレビやマスコミの影響が大きいのは日本もフランスも同じですが、言葉によって相手を魅了する、あるいは打ち負かすことに大きな価値を置いているのがフランスだ

と思います。オランド氏に人気がないのは、国際経験や大臣歴がないことだけでなく、演説に魅力を欠くことも大きな要因です。オランド氏に比べれば、サルコジ氏にはカリスマ性があります。年輩のフランス人のなかには「ドゴール大統領は演説をするのに原稿は読まなかった」と今の政治家たちを批判します。言葉、態度、外見などの違いこそあれ、人を魅了したい、魅了されたいというのがフランス社会ではないでしょうか。

そのテレビ討論は2日夜21時から始まり、宣伝も休憩もなく、2時間45分一気に続けました。4人に1人(フランス総人口約6500万人/有権者数約4600万)の視聴率でした。オランド候補が不利な場面もありましたが、白熱戦で、反サルコジの流れを変えることは出来ませんでした。6日投票の結果は、オランド候補(51.76%)、サルコジ候補(48.33%)。シラク大統領下の大臣から大統領へ、この10年フランスの舵取りをしてきたサルコジ氏に対する反発は否めません。言葉で魅了しても、結果が伴わなければ人は離れてしまいます。国の政治に限らず、行き詰まった事態に陥ったとき、新たな変化を求めるのは人間の心理です。オランド候補に代わることで何かが変わるかもしれない、そんな心の動きが今回の決戦に表れたように思います。これから5年間、オランド大統領のフランスになります。フランス共和国のアイデンティティー、移民政策が大きくクローズアップされた選挙でもありました。フランス人のみならず、私たち外国人にとっても、より住みやすい国になって欲しいと思います。